

張家口の崩れたレンガ塼

洲 浜 昌 三

ポプラの綿毛が雪のように舞う

五月の古都 北京

そこから汽車に乗って

北西二〇〇キロの町 張家口ジャンジャコウをめざす

そこは モンゴルとの国境の町

北の山並みに万里の長城が延々とびる町

八十歳の義母ははが義父ちちと過ごした青春の町

七月二十五日に生まれたばかりのあなたが

三週間後に敗戦をむかえ

はるか日本へ逃避行をはじめた町

義母ははの遠い記憶を求めて張家口ジャンジャコウの町を歩いても

満州鉄道病院の建物はどこにもない

「ここら辺に病院があつたはず」

新しくなつたビルの前に立っていると

仙人のような長い髯ひげの老人がやって来て言う

「このビルの裏に昔の病院があつた」

ビルの裏へ行ってみると

赤茶けて崩れかけたレンガの塼

戦争孤児にならず

日本海に捨てられず

今 五十五年ぶりに

生まれた病院のレンガと再会

「ふるさとに乾杯！」

缶ジュースを

五月の張家口ジャンジャコウの空高く掲げると

急にあなたの顔が崩れ

涙があふれて止まらない

(詩集『春の残像』より)